

日本語数量詞も

「うなぎ文」的に使える？

～「私は1個だ：I am an one」～

張 琴琴

北海道大学 大学院文学院
言語科学研究室

4 質の高い教育を
みんなに



8 働きがいも
経済成長も



10 人や国の不平等
をなくそう

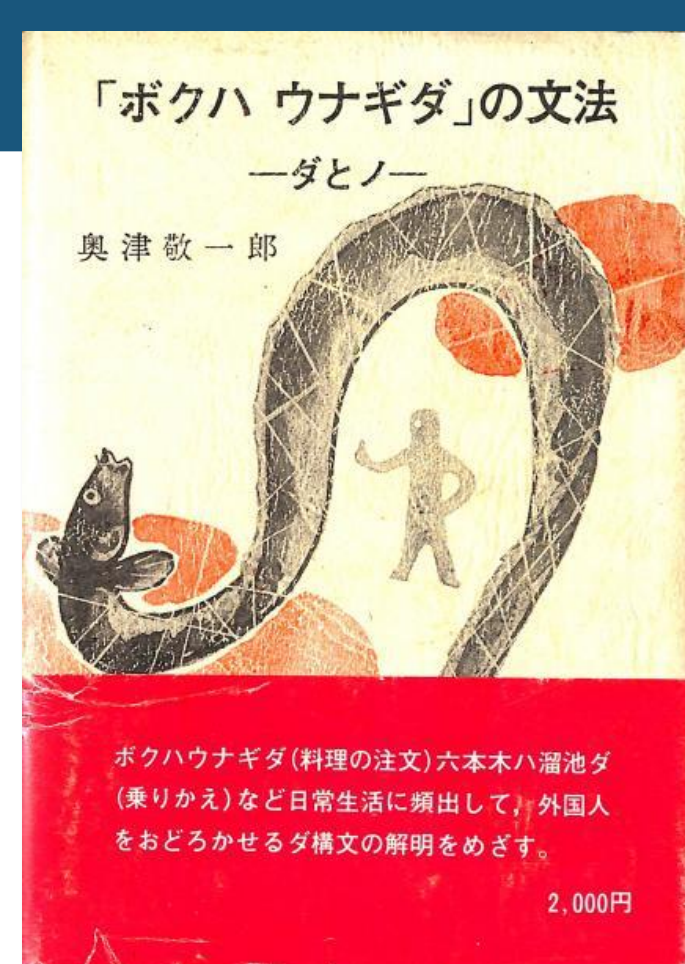


未来社会のあるべきかたち

- ◆ 日本語教育の質の向上に貢献する
- ◆ AIによる自動翻訳の精度向上に寄与する
- ◆ 外国人にとって住みやすく働きやすい日本へ

『うなぎ文』とは

日本語研究の第一人者である、金田一春彦氏によって最初に取り上げられ、その後その内容で奥津敬一郎氏が著書の『「ボクハウナギダ」の文法』が由来。



【うなぎ文の例文と解説】

飲食店での注文をする際、「君は何を食べる？」と聞かれ「僕はウナギだ」と答える。文だけ取ると、

「僕＝うなぎ」（直訳すると、**I am an eel**）



という変な意味になるが、通常の会話の中では「僕はウナギを食べる」「僕はウナギを注文する」という文が省略されていると理解することができる。

「数量詞」と「うなぎ文」

数量詞が「うなぎ文」に、

できる場合

A：家から職場まで、
何分かかりますか？

B：私は**45分**です。

A：きさまは、何個の
ドラゴンボールを
集めた？

B：オラ、**3つ**だ！



できない場合

A：今日どうだった？

B：私**5個**だった。



「うなぎ文」における数量詞の語用論的制約

この文法が成立する条件として、

- ① 文脈から数量詞の指す対象が推定できる必要がある。
- ② 数量が情報焦点になっている必要がある。

例) A：桃を何個食べますか？（個数が情報焦点）

B：僕は2個（桃が数量詞の対象と推定可能）